

姉妹都市締結20周年記念

思い出のパンプローナ！

訪問記念作品集Ⅱ



山口公園（パルケ・デ・ヤマグチ）

山口市・山口ナバラの会

表紙の写真解説

山 口 公 園

1995年の姉妹都市締結15周年を記念してパンプローナ市に日本庭園を造園することが決まりました。山口市の造園技師達が渡西し、現地の技師達との共同作業で1997年6月に完成。この年、山口市から42人の訪問団がパンプローナを訪れ開園式に参加しました。

広さは約6千m²で、滝、石橋、築山、東屋、州浜があり、石が敷き詰められた本格的な日本式庭園には様々な植物が植えられています。

今では憩いの場としてパンプローナ市民に親しまれています。

1頁の写真解説

パ ン プ ロ ー ナ 市 役 所

1423年、カルロス3世がサン・セルニン、サン・ニコラス、ナバレリアの3城市を統合し、この場所に市庁を置くことを決めました。現在の庁舎正面は15世紀に建てられた物ですが建物全体は1760年に完成しました。

サン・フェルミン祭の当日、7月6日の正午少し前になるとパンプローナ市民、観光客、ここを訪れた全ての人々の目は市役所の時計に釘付けになります。この時計の長針が12を差したとき、仕掛け花火の打ち上げが、祭の始まりを告げるのです。

もくじ

・ もくじ	1
・ はじめに	2
・ 訪問団日程表	4
・ 記念式典	6
・ 訪問団手記	9
・ 訪問団紹介	19
・ 新聞掲載集	21
・ 思い出アラカルト	25



パンプローナ市役所

はじめに

山口市パンプローナ市姉妹都市締結20周年記念友好訪問団実行委員長 山口ナバラの会 会長 多々良 孝一



「山口ナバラの会」は、姉妹都市締結20周年を記念し、友好訪問団を企画し、山口市の後援にて5月10日より8日間パンプローナ市に行つてまいりました。多くの市民の皆様の参加にて市民交流ができました。又、記念植樹したサクラ20本が毎年3月には美しい花を咲かせます。花の下でサルーといきたいですね。市民団の方のイタリア（ミラノ）2日間、コモ湖、又、ミラノ市内の町、イタリアゴシック建築の美しさや、高級ブティック等楽しい思い出ができた事と思います。この様な計画を数年後にも計画したいと思っています。又の御協力をお願いします。市長をはじめ市当局、JTBの職員の皆様、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。



サビエル城見学 5月13日（土）

1506年4月、サビエルはこの城に生まれました。サビエルは1549年8月、鹿児島に上陸。1551年4月大内義隆に会って布教の許可を得、山口でも布教しました。

現在サビエル城は宣教博物館になっています。

山口市にあった旧サビエル教会は、サビエルの生家であるこのサビエル城を模して造られました。

山口市パンプローナ市姉妹都市締結20周年記念友好訪問団 団長挨拶 山口市長 佐内 正治



訪問団を代表しまして、お礼の御挨拶を申し上げます。

ハビエル城で生を受けた聖フランシスコ・サビエルのご縁で山口市とパンプローナ市が姉妹都市となりまして、早20年が経過いたしました。その間、両市は地理的な距離を乗り越え、お互いの友情を育んでまいりました。パンプローナ市との交流が年々活性化していることは、ヨランダ・バルシナ パンプローナ市長様をはじめとするパンプローナ市役所の皆様の御支援の賜物と心から感謝を申し上げる次第です。

20周年を大きな節目といたしまして、友好の絆を基礎にこれからも両市の友情と信頼をより確かなものとし、21世紀に向かって新しい歴史を創り上げて行きたいと思っています。

パンプローナ滞在中には、パンプローナ公立語学学校、ナバラ州立大学、ナバラ大学を訪問させていただきました。特に、公立語学学校では今年から初めて設けられた日本語科で学ぶ30人の生徒とともに「第1回日本文化の日」に参加し交流を深めたところです。これを機会に、将来は青少年による交流が盛んになることを期待しています。

今回の訪問の一番の目的は、平成9年に完成した「山口公園」に桜の記念植樹を行うことでした。

聖フランシスコ・サビエルも愛したであろう日本の桜を両市の友好の証である「山口公園」に、姉妹都市締結20周年を記念して、20本の桜を植樹できましたことに心から感謝申し上げますとともに、この桜がパンプローナ市民の皆様にも末永く愛され続けることを願ってやみません。

両市は親交と友愛の名のもとに、協力的な交流を育みながら姉妹都市として歩んでおります。今回の訪問中にパンプローナ市の皆様からいただきました心のこもったおもてなしは、訪問団全員が生涯忘れることのできない思い出となりました。

これからも友情に満ちた関係がますます深まり、両市がともに発展していくことを祈念いたしまして、お礼の挨拶いたします。



ヨランダ・バルシナ市長と記念植樹



パニュエロ (赤いスカーフ) を贈られた佐内市長

訪問日程

【日程表】市役所関係者

	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	スケジュール
1	5月10日 (水)	小郡発 博多着 福岡空港発 関西空港着 関西空港発 チューリッヒ着 チューリッヒ発 バルセロナ着	07:33 08:23 10:00 11:00 12:50 18:15 20:25 22:05	こだま563 JD520 (日本エアシステム) SR163 スイス航空 SR668 専用車	新幹線にて博多へ 福岡空港へ 空路、関西空港へ 出国手続 空路、チューリッヒへ (乗り継ぎ) 空路、バルセロナへ 着後、ホテルへ (バルセロナ泊)
2	5月11日 (木)	バルセロナ バルセロナ発 パンプローナ着	 17:20 19:35	専用車 IB8407 イベリア航空 専用車	出発まで、バルセロナ市内視察 空路、パンプローナへ 着後、ホテルへ (パンプローナ泊)
3	5月12日 (金)	パンプローナ		専用車	ナバラ美術館見学 パンプローナ市長表敬訪問(市役所) 日本の写真展除幕及び見学 パンプローナ公立語学学校、ナバラ州立大学、 ナバラ大学訪問
4	5月13日 (土)	パンプローナ		専用車	パンプローナ市との事務協議 20周年祭(山口公園) 両市長スピーチ、記念植樹、 民族舞踊等 サビエル城見学
5	5月14日 (日)	パンプローナ発 バルセロナ着	19:05 20:25	専用車 IB8406 専用車	パンプローナ大聖堂見学 パンプローナ大聖堂合唱団との交流 空路、バルセロナへ 着後、ホテルへ (バルセロナ泊)
6	5月15日 (月)	バルセロナ発 チューリッヒ着 チューリッヒ発	09:40 11:20 14:00	SR661 SR162	空路、ミラノ (乗り継ぎ) 空路、帰国の途へ (機中泊)
7	5月16日 (火)	関西空港着 関西空港発 新大阪着 新大阪発 小郡着	08:40 11:18 12:06 12:41 14:46	はるか18 ひかり369	入国手続 JRにて新大阪へ (乗り越し) 新幹線にて小郡へ 着後、解散

市役所関係者

佐内正治(団長)・秋本邦彦・佐内幸枝・内田武義・柴崎和幸・松永光弘・吉武真紀

山口ナバラの会関係者

多々良孝一・藤村尚美・岡部敏雄・武田壽生・石光文次・磯部順子・杉山慶子・岡本ユリ子・岡本 泉
天川睦子・國田信晴・駒井末次・植松香代子・原 美都子・増谷正子・山本弥生・石我則行・守田節子

【日程表】山口ナバラの会関係者

	月日(曜)	地 名	現地時刻	交通機関	ス ケ ジ ュ ー ル
1	5月10日 (水)	小 郡 発 博 多 着 福岡空港発 関西空港着 関西空港発 ミラノ着 ミラノ発 バルセロナ着	06:27 07:25 08:30 09:30 11:55 17:25 19:55 21:30	こだま671 JL322 (日本航空) AZ795 アリタリア航空 AZ056 専用車	新幹線にて博多へ バスにて福岡空港へ 空路、関西空港へ 出国手続 空路、ミラノへ (乗り継ぎ) 空路、バルセロナへ 着後、ホテルへ (バルセロナ泊)
2	5月11日 (木)	バルセロナ バルセロナ発 パンプローナ着	 17:20 19:35	専用車 IB8407 イベリア航空 専用車	出発まで、バルセロナ市内視察 空路、パンプローナへ 着後、ホテルへ (パンプローナ泊)
3	5月12日 (金)	パンプローナ		専用車	ナバラ美術館見学 パンプローナ市長表敬訪問(市役所) 日本の写真展除幕及び見学 パンプローナ公立語学学校、ナバラ州立大学、 ナバラ大学訪問
4	5月13日 (土)	パンプローナ		専用車	20周年祭(山口公園) 両市長スピーチ、記念植樹、 民族舞踊等 サビエル城見学
5	5月14日 (日)	パンプローナ発 マドリッド着 マドリッド発 ミ ラ ノ 着	15:00 15:50 19:25 21:30	専用車 IB387 AZ073 専用車	パンプローナ大聖堂見学 パンプローナ大聖堂合唱団との交流 空路、マドリッドへ (乗り継ぎ) 空路、ミラノへ 着後、ホテルへ (ミラノ泊)
6	5月15日 (月)	ミ ラ ノ		専用車	終日：ミラノ市内視察 (ミラノ泊)
7	5月16日 (火)	ミ ラ ノ 発	14:25	専用車 AZ794	出発までミラノ市内視察 空路、帰国の途へ (機中泊)
8	5月17日 (水)	関西空港着 関西空港発 新大阪着 新大阪発 広島着 広島発 小 郡 着	09:10 10:48 11:36 12:06 13:54 14:01 14:46	はるか16 ひかり117 こだま623	入国手続 JRにて新大阪へ (乗り越し) 新幹線にて小郡へ 着後、解散

記念式典

姉妹都市締結20周年記念祭

5月13日（土）

友情と平和を象徴する「山口公園」で行われた20周年記念祭では、園内に20本の桜の苗木（品種：開山）が訪問団とヨランダ市長によって植樹された。

両市長によるメッセージの交換、パンプローナのフォークダンスグループによるダンスやコンサートなどが行われた。

山口公園には鯉のぼりが上げられ、天候にも恵まれた記念祭は温かい雰囲気になりました。



フォークダンスグループが地方の踊り“ホタ”を披露してくださいました。



演技に見入る真剣なまなざし



植樹した桜の前で



地元のオーケストラの演奏

パンプローナ市長歓迎のあいさつ

パンプローナ市長 ヨランダ・バルシナ

パンプローナのみなさんこんにちは。

パンプローナ市と山口市の姉妹都市提携20周年を記念して、今日私たちはこの公園へとやって参りました。当時この両都市の代表として、フリアン・バルテス市長と中野正議長が姉妹都市協定に調印されました。その友愛の意向を元にした声明がそれ以来ずっと永続して参りました。

そして今日また、このセレモニーにそれを思い起こし再確認せんとするものであります。その上、今年はまだこれ以上に意義深い記念でもあります。今から450年前、聖フランシスコ・サビエルはサンフェルミンとともに長い間守護聖人ですが、この方が山口に到着されました。この飽くこと知らぬ旅人であり信仰の人、挫折に動じることのないスペイン人の聖人の歩んだ轍の後は、そのとき以来ずっと消えることなく、この日本の都市に刻印されてきました。山口市とパンプローナ市の湧き出ずる友情と理解の絆の、その結びつきの土台を世界平和の促進に貢献できんことをメインテーマとして記されております。このユニバーサルな願いがそのまま聖フランシスコ・サビエルを突き動かし、そして同様に長い年月にわたって多くの男女を問わずナバラの、彼の足跡に続いた人々の信仰と希望というコンセプトと軸を一つにするものであります。

世界平和というものは私が切望できる最高のものです。平和は総括的にいって全社会にとって、そしてあらゆる個人にとっての生きる権利です。私たちを山口市に結びつけてくれたこの姉妹都市関係が、どうかこれほど望まれている平和を成し遂げる一助ともなってくれるよう、そしてこれがまた発展と幸福の将来を築くことができるよう、私たちを力づけてくれますよう、私たち両都市は、そこにあってこそ調和を持って相互に歩んでいける成果を分かち合えることを知っております。

パンプローナの全市民が何か誇るに足りうるものがあるとすれば、それは市内の縁が量においても質においても豊かであることです。私たちの公園や庭園はそれを楽しみ、自然にふれあわせてくれます。そしてそれによって、私たちのこの市にあって、より快適に生活を営ませてくれています。しかしながら、その中でもこの公園がひとときわ抜き出ていることは疑い得ません。その理由がプラネタリウムが設置されているからというのでは無く、その特異さ、その広がり、そしてそこに含有される様々な衣装のもたらす固有の味わい故だからです。

様々な衣装と申しましたのは例えば、石橋、あずま屋などのことですが、このパンプローナではブエンテ、エルキヨスコデル、ラゴといったそのスペイン語名で皆に知られています。この公園では水と岩と木々といった多様な要素が結びつけられています。そして園内で子供たちは戯れ、若者や大人たちは憩いとくつろぎの場を見いだすことができます。それだからこそ、ここはみんなにとっての出会いと交流の場となったわけです。そしてこれは、この姉妹都市協定で私たちが到達せんとする目的と達成の一つの例として挙げられます。結びつき、交流し合い、私たち二つの都市がアイデアとプロジェクトの交換および団結の絆を軌道に乗せ得る出会いの場をお作りいたしました。

ゲーテの言葉に「人を知るにはその人の家に行ってみなければならない。」というものがあります。そしてそれを私たちの姉妹都市である山口市が為さんとなさったことなのです。私たちの家であるこのパンプローナ市を訪れ、そして私たちとパンプローナ市をよく知ろうとされているのです。それだからこそ、今日ここで、山口市長佐内正治様をはじめとするその代表団のみなさまが、今回の訪問の実現に当たって払われたご苦労に対して心からの感謝の意を表したいと思います。

私は市長として、この両市の結びつきが今後も強固なものであり、丁度この公園の池に湧き出る噴水の如く透明に澄み渡って、不動の私たち全ての願う未来へと掲げられんためにこの絆を育み、強め、促さんと願う次第です。

植樹される20本の桜によって今日私たちの結びつきを再び強められますよう、両市の姉妹協定の

証人となってくれると信じます。そして今後は植えられました桜の姿は、私たちの友情の麗しさと、私たちの強固な結びつきを思い起こさせるシンボルとなるものと存じております。どうもありがとうございました。



山 口 市 長 あ い さ つ

山口市長 佐 内 正 治

本日ここに、パンプローナ市と山口市との姉妹都市締結20周年記念の記念植樹に、23人の山口市民訪問団とともに出席することができましたことは、誠に喜びにたえません。

友好の絆のもと、パンプローナ市と山口市が姉妹都市の契りを結んで、はや満20周年を迎えました。これまでの交流で培われた友情と信頼は、遠く離れたお互いの距離を近づけてくれました。両市の密接な関係が永久に続くことを願っております。

聖フランシスコ・サビエルも愛されたであろう日本の桜を、両市の友好の証である「山口公園」に植樹できますことに、心から感謝申し上げますとともに、この桜がパンプローナ市民の皆様に愛され続けていただければ、この上ない喜びでございます。

終わりにになりましたが、これからも友情に満ちた関係がますます深まり、両市がともに発展していくことを祈念いたしまして挨拶いたします。

(ムチャス グラシアス)

平成12年5月13日



訪問団員手記

山口市・パンブローナ市姉妹都市締結二十周年記念友好訪問団に参加して

山口市議会議長 秋本 邦彦

パンブローナ…私にとっては懐かしいような、憧れに満ちた語感をもった響きである。

かつて私にも一応、青春時代があった。そんな頃に読んだE・ヘミングウェイの小説に「日はまた昇る」があった。第一次世界大戦後のヨーロッパを舞台に「失われた世代」の男女の哀感を巧みな会話体の文章で紡いだ傑作である。時代背景は違ったが、当時の自分の心象風景と合致して何時までも心に残っている。ストーリーの四分の三がパンブローナで占められており、後に映画も見たが、街の描写が実に生き生きとしていたのが強く残像として残っている。なかでもサン・フェルミンの牛追い祭りのシーンは圧巻だった。

前置きがいささか長くなりましたが、これほど左様にパンブローナは私にとりましては例えば陳腐かもしれないが、初恋のひとに逢える喜びともいえるものであります。

駆け出し議員二年目に姉妹都市締結のはこびになり（昭和五十五年）ぐっと身近な存在となりましたが、訪れる機会はそうそうありません。今日に至った訳であります。

今回、はからずも訪問団一行に加わえていただき国際親善の一翼を担いその実を挙げさせていただきました上に、長年の夢が併せて叶うという望外の幸せに感謝あるのみです。

団員の皆様、ありがとうございました。

写真は尊敬する元市社会教育委員、清木顕太郎先生自作の七言絶句（漢詩）を歓迎晩餐会の席上でヨランダ市長に代理朗読後、贈呈している場面です。

聖人を詠む 清木顕太郎

聖人光臨万里風

群童村翁歡舞窮

朗朗留神大道寺

浩浩昊天五大隴

聖人（フランシスコ・サビエル）は遙る遙るとようこそ山口へ、ピレネー村落から召命により尊い使命と責任を持って、万里の風に乗って来られた。

老若男女の別なく、その信仰とお人柄に魅せられて、これをお迎えしたことである。

大道寺に於ける説教は、まさしく宇宙の創造主の観がありました。

浩々と輝く山口の天地はあたかも、聖人をお迎えするかのように玉のふれあうのに似た情景を展じたものでした。



「2,000円、出しさん」と多々良会長の一言。「何事ですか」と尋ねると「山口ナバラの会」の入会のお誘いである。行ったことはないけどパンプローナとの交流に理解がある人だったら誰でも、と



いう要は誰でも入会出来る会だ。快く了解して2,000円払ったところから私のパンプローナへの思いが始まる。

会員として行事へ参加し、総会などでパンプローナの話を聞き、パルケ・デ・ヤマグチの工事の様子をビデオでみると、何でも一度は行って見たいという気になって来る。極めつけは昨年12月に来日した「カテドラル大聖堂合唱団」の歓迎会で同席した合唱団員夫婦と片言の英語で「また、パンプローナでお会いしましょう」

と言ってしまったことである。もう会うこともないだろう、という気持ちと、いや、パンプローナへ是非行ってみたいという気持ちが同時に私の心の片隅に残っていた。

今回、多々良会長からは是非一緒に、というお誘いを受けて、友好訪問団に参加し、パンプローナを訪れた。公式訪問団と一緒にパンプローナ市より歓迎を受け、パルケ・デ・ヤマグチそばのホテルで3日間を過ごす、親しみを覚え、絵はがきでしか見たことのないサビエル城の訪問で、フランシスコ・サビエルを通じて山口市とは大きな関わりがあるんだという親近感は頂点に達したのである。全く判らないと覚えようとしなかったスペイン語が少しばかり判って来たと思うから不思議である。もう20年、いや30年前に来れば人生が変わっていたかも知れないと感じるのは大げさだろうか。パンプローナを訪れて気にいって永住しようと山口市を離れた王子夫婦の気持ちが分からないでもない。

姉妹都市締結20周年記念式典や、市内観光、サビエル城見学など予定通り日程を終えパンプローナを出発する最後の日に「カテドラル大聖堂」を訪れた。ここを訪れる予定を事前に聞いていなかったから、山口市で会った大聖堂合唱団のことは、経由してきたバルセロナの街やサビエル城を訪れた感激ですっかり忘れていた。

ところがここで、昨年、山口市のラ・フランチェスカでの歓迎会で同席した合唱団のあの夫婦にお会いしたのである。しかもその夫婦から声をかけていただいた。通訳を通じて「よくいらっしやいました。その節はありがとう」と。大きな感激である。初めて訪れた外国で、以前に会ったことのある人がいたこと、しかも、相手から声をかけていただいたことは今回の旅行で一番の思い出である。未だ名前は知らないが、相手は私を覚えていてくれていた。「またパンプローナでお会いしましょう」と言った約束が果たせたのである。大聖堂訪問のあと、サラサーテのことを聞いたら親切に教えていただいた団長のサガセタ氏を始め、合唱団の方々とカフェ・イルーニャで親しく食事をし、我々のバスを見送っていただいたこと、昨日のように鮮明に思い出す。

帰ってからこの訪問団の訪問した様子を多々良会長がNHKのローカル番組で報告されていた。パルケ・デ・ヤマグチや記念式典での佐内市長やヨランダ市長の挨拶の様子など、見覚えのある映像が進む中、なんと答礼のパーティで私がパンプローナの女性市議会議員と踊っている映像が出て来たのである。踊れもしないワルツのみっともないステップ、誰かに指名されたとはいえ、雰囲気盛り上

げようと断りもせず踊ったことを後悔しても、もはや遅く、ローカル番組とはいえ、TVで放映されてしまったのである。このことを今回、添乗員としてお世話になった熊本在住の守田さんにお礼を兼ねて早速Eメールで報告すると、「今後に備えて奥さんとステップの練習を・・・」とアドバイスをいただく始末。全く恥ずかしい話である。

私にとって大きな収穫はパンプローナのまちづくりであった。サインに規制があるのか、整然とした街並みや、古い街並みの保存、どこからでも入れる公園、道路そばの駐車場、ゴミの分別収集のための設備など長い歴史のヨーロッパでは当たり前のことも我々には新鮮に映る。山口市の国際交流のことに加え、私の今後の議会活動に生かしていきたいものである。

スペイン・パンプローナ市の訪問を終えて

山口市国際交流室 松永 光弘

山口市にとって初めての姉妹都市締結から20年、スペイン・パンプローナ市へ友好訪問団は、5月10日に山口を出発し、5月16日に全員が心の中に大きな感動と財産を得て、無事に帰山しました。

今回の訪問は、パンプローナ市表敬訪問や姉妹都市締結20周年祭として「山口公園」で行われる桜の植樹などに参加するほか、ナバラ大学や公立語学学校などを訪問すること、そして両市の今後の国際交流の方法を具体的に協議することでした。

スペイン・バルセロナ市に第一歩を踏み出してから帰国するまで、数多くの文化遺産を直接自分の目で見ること、ヨーロッパ大陸の西の果てスペインの雄大さを実感し、パンプローナの人々の国民性の一端を伺うこともできました。



「山口公園」での鯉のぼり掲揚で始まった記念式典には、桜の記念植樹、民族舞踊、音楽演奏等、企画された全ての催しが私達山口市訪問団に捧げられ、詰め掛けた多数のパンプローナ市民とともに多に交流を深めることができたと思います。

また、サビエルの生家、サビエル城を見学させていただきました。姉妹都市の縁となったこの城を早く見たいと思っていたのですが、想像していたとおり典型的な城砦造りで、ゴシック風の城門をくぐって城内に入ると、頑丈な厚い石造りの塀からなり、ところどころに小さな窓と銃眼だけの薄暗い建物でした。この地から遠く離れた日本によく来たものだと思えてサビエルのエネルギーを感じたところです。

今回の訪問で嬉しかったことの一つは、パンプローナ市の国際交流担当マルキーネス氏に会えたことです。彼は40歳の紳士。滞在中は殆ど我々訪問団と行動を共にしてくれ、同世代のため特に親近感を感じたところです。両市の国際交流の橋渡し役として、「お互いに頑張りましょう。」と、ワインで乾杯。担当同士の交流も行えました。

これまでの諸先輩方の努力のお蔭で、姉妹都市締結20周年を迎えられたことに感謝するとともに、パンプローナ市との交流がますます活性化するよう今後の取り組みにつなげていきたいと思っています。

ちょっとオーバーなタイトルになりましたが、女性に恋をしたのではないので問題は起きないでしょう。今回の二十周年記念の訪問で三回目となりました。最初山口公園の造園工事で仲間五人で初めてパンプローナに行った時から私の脳裏に陽気な人達そして街の風景と雰囲気強烈に焼きついて離れなくなり自分でもどうしてもこの様な気持ちになるのか不思議になります。今迄海外にもあちこち行きましたが、この様な気持ちにはなりませんでした。



恋した原因を自分なりに考えてみますと、山口市・パンプローナ市との姉妹縁組のお陰で造園の仕事や訪問団の一員としてパンプローナに行く機会を得て、その都度色々な人達と知り合う事が出来、言葉は通じませんが何か心では通じ合うところがあり、再会出来た時の感激もひとしおで長旅の疲れもふっとび元気になってしまいます。

何度見ても心が落ち着く街の風景と忘れる事の出来ないパンプローナの人達が原因だと思われます。又何年かたつと恋しくなると思いますが、その日のためにも仕事に精を出し頑張っと思う気力は充分なのですが、この暑さ、体力の方が問題です。いつ迄もパンプローナに恋していたいものです。

スペイン旅行

杉山 慶子

私にとって初めての海外旅行は、スペインでした。数ヶ月前より気持ちは、スペイン、その昔、コロンブスの大航海時代、フランシスコ・サビエルの日本への布教、あの有名なヘミングウェイの「日はまた昇る」等々歴史上の出来事を、本で写真でビデオでと忙しく見ながら心の中はスペインで一様になりました。帰国しての思いは、行く前、旅行中、帰国後と分けて見ますと、未だ見ぬ国への思いを巡らし想像している時、行く前が一番充実した期間でした。いざ旅が始まると、あれよあれよという間に日々は、流れる如く過ぎ去ります。関空に着くや日本語の文字を目前に安堵感と満足感にひたると共に又行きたいという願望がすぐに湧く、地図の上では遠方、十二時間余りで着くスペインを近くに感じました。バルセロナのホテルに着いたのは深夜。翌日は専用車で、統一された建物の色、マロニエの並木路、地中海のコバルト色等々、時はゆっくりと過ぎ去る。一つ一つを思い出し、文化の違いを生活習慣の違いを痛感する。歴史の重みと裏腹に陽気な人々の暮らしぶりを垣間見る。公共の公園、広場が至る所に有りよく整備されているにもかかわらず、散歩する人々のマナーは、これも国民性でしょう。私達は、良き人々に沢山出会いました。握手の時、あの吸いこまれそうな目付き、今でも心に焼きついています。訪問団ということで観光が少なかったのは残念でしたが、角度を変えてスペイン（パンプローナ）を知り、見学できました。そび



え立つ聖堂、車窓より見る山肌に建つ家々、地震国の日本からは、考えられない風景です。広々と青々とした丘の上の風車、これが二十パーセントの電力を担うと聞き驚く。スペインと山口の掛け橋となったハビエル城に行く、子供の頃より見ているサビエルの教会、時には遊びに行った。はるか遠い日本へキリスト教布教の為に、命をかけて渡って来ることの勇氣、使命感があったからこそ今日のサビエル教会が存在する今更ながらその偉業を再認識しました。そのサビエルが生まれ育ったお城を見学しました。その当時、どのような生活を送っていたのか計り知れませんが、不便で危険な日々を、祈りをささげることで救われていたのだろうか？私は八月に帰省した時、新しく建つサビエル教会に行き、祈りをささげました。イエズス様（神様）にささげる祈りも、私の中ではサビエルにささげる祈りとなりました。四百年前の歴史をこの目で確かめることができ満足しました。遠隔地より参加させて頂き新たな発見、感動を沢山いただきました。訪問団の皆様のおかげです。ありがとうございました。最後に会員の皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

おわり。



「スペインの思い出」

磯部 順子



私は旅行の前に、県庁国際課のエンマさんに、スペイン語とスペイン（南部と北部では、気候、風土、生活習慣、言語の違いなど）についての話を聞き、今まで感じたことのない複雑なスペインに興味を持ちました。エンマさんは、カタルーニャ地方出身なので、北部になり、今回私たちが行った、バルセロナ、ナバラとは、近い地方になると思います。エンマさんは、自分の生地カタルーニャを愛し、

誇りを持っていました。そして深い家族愛を！！

彼女の話と生き方は力強いものでした。私たちは、まずバルセロナに入り、一日バス観光をしました。雨が少なく、明るく乾燥したこの町は過去と現在が混沌とした、まさに西洋文明発祥の地でした。町中に点在するガウディの建造物、公園、今尚工事中の、サグラダ・ファミリアなど、圧巻でした。できることなら、もう少し、ゆっくり観光したかったです。パンプローナに入ってから、ナバラに連泊したせいもあり、とても好きになりました。毎朝、ホテルの窓の下に広がる山口公園を眺めるのも、心安らぐひとと





きでした。今のスペインは、夏時間なので、日暮れが遅く、遊びが優先というだけあって、バイタリティーのある国です。民族の誇りとか、人生というか一日の楽しみ方など、少しかいま見たような気がします。

市主催のセレモニーの後、バスに乗って、左右に壮大なぶどう畑を見ながら行ったハビエル城は、山の中の寂しい所がありました。決して大きな城ではないけれど、なにか、懐かしさを感じたのは、山口の亀山公園にあった、昔のサビエル記念聖堂に似ているせいだと思います。サビエル記念聖堂の地に立った時、今回の旅行に参加できたことの、喜びと感動でいっぱいでした。私はクリスチャンではないけれど、教会とか、ステンドグラスなどに、

ほのかなあこがれを持っていたように思います。

私にとって、初めての海外旅行は、楽しい毎日でした。いきとどいた気配りで、サポートして下さった、JTBの守田さん、軽快な語り口で、思い出しても笑ってしまう話術のたくみな、現地ガイドの宮本さん、旅のチャンスを与えてくれた兄（多々良孝一）、そして同行のみなさんに感謝します。ありがとうございました。Gracias!!

パンプローナの思い出

吉武 真紀



二年間のスペイン留学を終え、帰国したのは四年前。日本にいても、スペインと何らかの形で関わっていたい、と思ってきました。その希望がかない、山口市やナバラの会のお力添えで、パンプローナ友好訪問団に参加させて頂きました。

歓迎会、大学訪問、フォーマルディナー、二十周年祭など、様々なイベントがあり、どれも印象深いものでしたが、特に私の心に残っているのは、パンプローナ合唱団との再会です。

去年の秋、パンプローナ合唱団とは、山口ナバラの会主催のディナーパーティーで会っていました。彼らは、まるで昔からの友人に会うように、私達訪問団との再会を喜んでくれました。

大聖堂の中庭に面する回廊で、私達のために小さなコンサートが開かれました。大聖堂の美しい風景とすばらしい歌声が溶け合ってそこだけが非現実の世界のように見え、心を動かされました。

コンサートの後、中庭に集まり、写真を撮ったり、お話をしたりしました。去年一緒に撮った写真を持って来ている人もいて、盛り上がりました。皆一斉に、スペイン語と日本語で話し始め、通訳の私は大忙し。嬉しい悲鳴でした。この後、ヘミングウェイが通ったと言われるレストランへ行き、楽しい交流会は続きました。

歴史、宗教、文化、言語のどれをとっても全く違う二つの国の人達が、音楽を通じてこんなにも親しく、友達のように、兄弟のように感じる事ができるということはすばらしいことです。

パンプローナというと、美しい風景と共に、滞在中に出会った多くの人達を懐しく思い出します。合唱団の方々、パンプローナ市役所の方々、語学学校で日本語を学ぶ人達など、フレンドリーな方ばかりでした。またいつか再会できる、と信じています。そして、山口公園に植えた桜が成長していくように、私達の友情も大きく育っていけば、と思います。

思い出のパンプローナ

天川 睦子

旅行好きの友人から海外はどこに行ってもスケールの違いに目を見張る。特にヨーロッパは何度行



っても良いと聞いていたので此の度、お隣の方から誘いがあり参加しました。

行程表を見た時は、もっと他の観光地もあれば良いのになと思ったが、行って其の思いは消しとんだ。

行く先々の途中、バスの向こうに見える無限に広がる大地、高い高い空。中世をしのばせる重厚かつ荘厳な教会、たとえようの無い程の雄大で緻密な城、又町の美しい家並みやひずめの音を思い出させる石畳。どれひとつとっても映画で見る其の物でした。

その上、目的であるパンプローナ市交流の式典や、昼食パーティー、聖歌隊の美しいコーラス。市長御夫婦のきさくな人柄や他の方々共親しくなり、此の訪問団でしか味わうことの出来ない旅でした。

とにかく、今思う事は行って良かった素晴らしかったの一言です。

パンプローナ市を訪ねて

増谷 正子

「百聞は一見に如かず」とか。この度、訪問団の一人としてパンプローナ市を訪れることが出来ま



した。今までは、漠然とイメージしていただけの場所が、急に現実のものとして親しみを持って身近に感じられるようになりました。

今、アルバムに写真を整理しておりますと、沢山の思い出が鮮やかによみがえってまいります。中でも、姉妹都市の由縁ともなっているサビエル城を見学することが出来たことは心に残る思い出の一つとなっています。

サビエル城は、午後の明るい日差しの中で、気品に満ちた佇まいで、私達を長い間待ってい

てくれたようにさえ思えました。このお城で生まれ育ったフランシスコ・サビエルによって、450年もの昔から、この地と私達の町はつながっていたのかと改めて認識いたしました。同時に、当時の想

像も及ばない様々な苦難を超えた偉業に対して、感動を新たにいたしました。

パンプローナ市の滞在は3日間で、多くのことを知ることは出来ませんでした。機会があれば是非もう一度出かけて行きたいと思っています。

また、この旅行を通して出合った方々とのご縁をこれからも大切にしていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

カテドラル（大聖堂）にて

山本 弥生



ゆるやかな稜線の山々は遠くから見ると、まるで苔に覆われているようだ。のびやかな山の緑が空と陸地とを区切っていて、その連なりの窪みにパンプローナがある。街の通りにはマロニエや楓が深い蔭を落す。旧市街の長い石畳を少し登ると、二本の美しい塔を持つ淡い色の大聖堂(カテドラル)が聳えている。ここはサビエルが赴任を強く望みながらも、日本への伝導の道の方を選んだ。という由緒深い教会である。サビエルさんは、ここで司教になっていたら宗教者として平穏な一生を送ることができたのかも知れない。

日曜日にもかかわらず、パンプローナ大聖堂合唱団の皆さんは私たちのために集まって昨年来日の時のあの美しい歌声を再び聴かせて下さった。歌声は朝日の聖堂の回廊や中庭に響き渡り、私たちの心を浄めてくれる。数百年の間培われた、深い信仰の伝統に根ざした清らかさは、異教徒の私たちの胸にもしみ入ってくる。案内をして下さった指揮者のサガセタ氏がほんの少しだけ聴かせて下さった古いパイプオルガンの、とりわけ深く温かな音色を忘れることができない。

パンプローナの皆さんが示して下さいナバラの文化に匹敵する深さを、私たちは山口の文化に感じるだろうか。独自の文化を誇らかに守り育てるには、あの方々のような誇りと熱意と、そして謙虚さも見習わねば、と心から思った。

パンプローナへの旅

原 美都子

6月10日小郡駅に集合。新幹線で博多まで行き、福岡空港から関西空港へ。ガイド嬢は熊本の守田さん。一言の無駄も無い。彼女も中学生時代父を亡くされ修学旅行に行けなかった。それなら自分の力で行こうと決意。今友達は何のあたりを旅して居るだろうと地図を買って来て時刻表とのニラメッコが始まった。一人でこうした旅が始まったとのこと。

カッコ良い彼女もこんな努力で今日の自分が有る。このような彼女との出会いで本当に良い旅でした。

出国手続きを済ませ搭乗口に行く途中、「ミセス原」との声、唯か私を呼んでいる。「搭乗券お持ちですか」手にあるはずの搭乗券が無い。落したらしく追いかけて届けて下さったのだ。日本を出る前からこの調子では先が心配だがどうにか機上の人となりパンプローナへと旅立った。



飛行機の中では、高度13,000メートル、外気温マイナス63度と表示され13時間にも及ぶ空の旅が始まっていた。

イタリアのミラノ空港に着いてもまだ空は明るかったが、飛行機を乗り継ぎスペインのバルセロナについてバスでホテルへ。

オリンピック会場を見学。初めてみる石の彫刻には驚きの連続だった。石の文化、パンプローナの街、二百年前其のまま百年先を見越しての街づくりがなされ下水道も其の当時からあったとのこと。

一代かぎりの日本の住まい。私達は自分の城をめざして一生を終える。

パンプローナの市長さん四十歳の女性、元大学教授、私達はパトカーの先導で市役所入り。市役

所での会見、少し緊張、明るい会場でホットした。立食パーティは良かった。色々な方々と手ぶりで話が出来、楽しかった。

夕食会はパンプローナの人との交流も無く同じテーブルに私達のための席で折角のパーティなのに少し残念でした。

感謝の気持ちをこめて

JTB山口支店 石我 則行

この4月より、山口支店勤務となり、実質的な初仕事が「スペイン・パンプローナ友好訪問団」のご幹旋と、市長様をはじめとした山口市代表団の添乗でありました。



スペインにはもちろん添乗で5～6度渡航させていただいていましたが、マドリード・バルセロナ・アンダルシア地方等代表的な観光地のみで、パンプローナについては初めての訪問でありました。

それまでのナバラ州・パンプローナ市についての知識は「牛追い祭」程度の浅いものであり、資料を取り寄せ、付け焼き刃程度の知識を加えたのみで、ある意味不安を持って参加致しました。

実際訪問させていただき感じましたのは、今までの交流の濃い内容と、それに培われた人間関係があります。まず驚いたのは、山口公園を始めとした物的交流です。サビエル城にも植樹をされているのはびっくりしました。また、人的交流についても、具体的に挙げる事が難しい程深い関係を何件も見させていただきました。

過去何度か他の姉妹都市交流の添乗をさせていただきましたが、うわべだけでなくこれ程突っ込ん

だ交流をされている例は経験がありませんでした。

私も、山口市民となり仕事を通じてという形にはなりますが、引き続きお手伝いをさせていただければという気持ちで一杯でございます。

最後に、もう一人の添乗員守田共々、スケジュール運行に協力いただいた全てのご参加者はもとより、市長様をはじめとした山口市の皆様、また完璧な受入をしていただいたパンプローナ市の皆様、ここまでの実績を作られたナバラの会幹部の皆様に変更して感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

国際交流再会の喜び・友好の果実に花が咲く

事務局長 藤村 尚美

昨年の1999年12月3日、聖フランシスコ・サビエルの命日にスペインからパンプローナ大聖堂合唱団が山口市を訪れ、山口市民会館で450周年記念コンサートが開催されました。これを契機に「山口ナバラの会」では、客人たちをもてなし身ぶり手ぶりや歌を交え、ハーモニカ演奏やコーラスで和やかな雰囲気の中で、国境を越えた友情交換の輪を広げました。友情の証に、名物サンフェルミン祭で首に巻く真っ赤なネッカチーフを首に着け記念撮影（左から2番目と右側の人は親子です。中央に私と通訳を務めた奈古高校の吉武先生です）。この写真を焼増ししてパンプローナで彼女達に手渡しましたら感涙にむせんでおられました。



山口市を訪れた時の合唱団一行

山口ナバラの会」では、客人たちをもてなし身ぶり手ぶりや歌を交え、ハーモニカ演奏やコーラスで和やかな雰囲気の中で、国境を越えた友情交換の輪を広げました。友情の証に、名物サンフェルミン祭で首に巻く真っ赤なネッカチーフを首に着け記念撮影（左から2番目と右側の人は親子です。中央に私と通訳を務めた奈古高校の吉武先生です）。この写真を焼増ししてパンプローナで彼女達に手渡しましたら感涙にむせんでおられました。

又、今回の訪問で山口を訪ねられたパンプローナ市の合唱団のみなさんと、5ヶ月後に偶然再会出来たことは至上の喜びです。

私を見つけ「まあ、その節は」とばかりとびついてキスされたときは驚きと、ちょっと照れましたが感動させられました。指揮者の方もよく覚えておられたものにもびっくりすると同時に敬意を表します。白と赤のワンピースを着ておられるかたが前記に紹介した親子さんです。美しい声、美しい笑顔、すてきですね。またお会いしましょうと再会を誓い合い実現出来たことは、生涯の思い出となることでしょう。

国際交流とは「心」だと深く感じました。



パンプローナ市で再会



秋本邦彦

五月晴れの記念公園で散策中の市民と交流

訪問団紹介



天川睦子

ヨランダ市長を囲んで



石光文次

ワインを飲んで赤ら顔、パンブローナの人は普通の顔。アルコールは強いお国柄だそうです。



磯部順子

バルセロナ市内にて



内田武義

公立語学学校日本語科で学ぶ30人の生徒と交流を深めました。語学の学習とともに、この日は日本文化についても学習を進めておられました。色紙や掛軸の漢字のうまさにビックリ。



岡部敏雄

ワインも美味しかったけどウェイトレスの女性がすごく可愛かった。



岡本泉

パンブローナ市役所前にて撮影



岡本ユリ子

バルセロナ・グエル公園にて



國田信晴

買物の事ならおまかせください。シャネル・グッチ・プラダetc.



駒井末次

写真より喰い気、スペイン料理も美味しかったけど「ぎせん」の料理もおいしいですよ。



佐内正治・幸枝

パンブローナ市役所はこの様なオールドタウンに囲まれている。牛追い祭にはこの通りを多くの人と牛が駆け抜けるのだろうが日曜日の朝は人通りも少なく静かである。



柴崎 和 幸

市庁舎を中心とした町は歴史の深さを感じ、山口公園での日本の桜の植樹は印象的であった。今後もさらなる両市の交流と友情を深めていかなければいけない。



杉 山 慶 子



武 田 壽 生

初めてのパンブローナ、「パルケ・デ・ヤマグチ」や古い街並み、「サラサーテ通り」と「カフェ・イルーニャ」みんな、みんないい思い出になりました。



多々良 孝 一



檜 松 香 代 子



原 美 都 子



藤 村 尚 美

ヨランダ市長と共に



増 谷 正 子



松 永 光 弘

バルセロナ・カタルーニャ美術館を後方に。午後からは、いよいよパンブローナへ。



山 本 弥 生



吉 武 真 紀

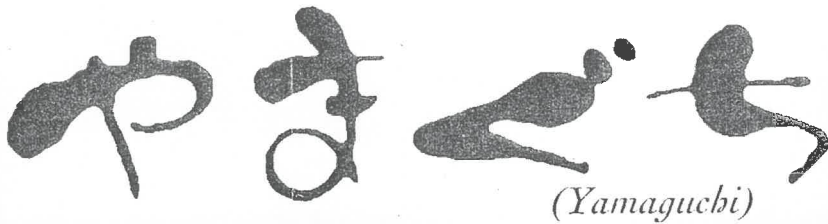
パンブローナの人達は陽気で明るく、人生を楽しんでいるようでした。これからもずっと交流を続けていけたらと思います。



石 我 則 行

皆さんと一緒に楽しい旅をさせていただき感謝しています。

ANIVERSARIO



(Yamaguchi)

Pamplona

A 14.000 KMS.

■ **'Entrada al monte':** El término Yamaguchi significa *entrada al monte* porque la ciudad es la paso natural hacia la montaña Hobonsan. Tiene unos 130.000 habitantes, y se encuentra situada en el extremo suroccidental de la isla de Honshu. Yamaguchi es un importante centro comercial de arroz, tabaco y cítricos, y cuenta también con industria textil y de la madera, así como con yacimientos de carbón. Su alcalde actual es Masaji Sanai.

■ **Cerezos en flor:** A finales de marzo o comienzos de abril, todo el mundo espera ansiosamente a que el meteorólogo de la televisión pronostique el día en que los cerezos florecerán en cada ciudad. Entonces, se celebran bajo los árboles fiestas para disfrutar de la vista de las flores (*hanami*), que, según la simbología japonesa, representan la belleza efímera.

Hace 20 años, el 19 de febrero de 1980, el entonces alcalde, Julián Balduz, y el presidente de la Diputación de Yamaguchi, Tadashi Nakano, firmaron el acuerdo que estos días se conmemora



FOTOS: JAVIER SÁLDISE, CHEMA PÉREZ Y J.M. OCHOA DE OLZA

1 y 2. Estatua y gigante de San Francisco Javier en Yamaguchi. El santo llegó a la ciudad nipona en 1551. 3. En el 'Rincón de la Amistad' de Yamaguchi los barcos están

su homólogo pamplonés, Segundo Valimaña, para mostrarle su interés por establecer algún lazo de amistad. Hay que recordar que todo este cariño tenía que ver con San Francisco Javier y la tarea evangelizadora que éste realizó en Japón. El santo visitó por primera vez el país nipón el 15 de agosto de 1549 (se está celebrando el 450 aniversario de la llegada) y recaló en Yamaguchi en 1551. Allí, con motivo del 400 aniversario, se erigió en 1951 un templo en su nombre, que en 1991 fue destruido por un incendio, y reinaugurado en 1997.

Aquel primer contacto, vía telegrama, se materializaría en enero de 1979. Pamplona estaba entonces en plenos preparativos de los comicios municipales, previstos para el 3 de abril, cuando el 30 de enero de aquel año, llegó al aeropuerto un grupo nipón de 15 personas, encabezado por Yasuo Hori, al que le esperaban el primer edil, Jesús Velasco, y los concejales Juan Fromknecht y Miguel Ángel Muez. Dicen las crónicas, que los japoneses permanecieron en Navarra dos días, en los que se hospedaron en el Tres Reyes y aprovecharon para visitar el

Castillo de Javier, y que el alcalde Hori afirmó en su discurso: "Hemos venido desde Japón sólo a Pamplona"

地元新聞

地元新聞「Diario de Navarra」と「Diario de Noticias」は5月13、14日紙面に写真入りで訪問団や20周年記念祭の紹介をしている。

PAMPLONA Y LA CUENCA

El Ayuntamiento de Pamplona recibió ayer a la delegación japonesa de Yamaguchi

Ambos alcaldes mostraron su deseo de fomentar los lazos de unión entre las dos ciudades

ÓSCAR IGOLA, PAMPLONA.

La corporación municipal, comandada por la alcaldesa, Yolanda Barcina, recibió ayer de forma oficial a la delegación japonesa de Yamaguchi, que visita Pamplona con mo-

tivo del vigésimo aniversario del hermanamiento entre ambas ciudades. Los dos alcaldes mostraron su deseo de fomentar los lazos de comunicación y solidaridad entre ambos pueblos, dentro de un acto oficial que

incluyó un intercambio de regalos: Masaji Sanai entregó a la alcaldesa de Pamplona la figura de una «geisha», mientras que Barcina donó a su homólogo nipón una reproducción de las torres de San Cernin.

Los 23 miembros de la delegación japonesa llegada a Pamplona disfrutaron ayer de una ajetreada jornada, que comenzó a las diez de la mañana con la visita al Museo de Navarra. Allí les esperaba el director de la institución, Francisco Javier Zubiaur, que ejerció de guía para el grupo.

Tras visitar la capilla del antiguo Hospital Provincial, que hoy alberga al museo, la comitiva ascendió a la tercera planta para conocer los entresijos del barroco en Navarra. La delegación nipona se mostró especialmente interesada en la orfebrería, así como en la obra de Francisco de Goya «Retrato del Marqués de San Adrián», una de las joyas del museo. Una planta más abajo, la representación de Yamaguchi disfrutó de los restos del gótico navarro.

Por último, Francisco Javier Zubiaur mostró a los visitantes la planta donde se albergan los restos románicos, con especial detenimiento en la arqueta de Leyre. La visita terminó con un intercambio de regalos entre el director del museo y el alcalde nipón, Masaji Sanai.

Recepción oficial

A las once de la mañana, la delegación japonesa llegó al Salón de Recepciones de la casa consistorial, donde les esperaban una veintena de corporativos municipales de todos los grupos políticos. Yolanda Barcina, presentó al alcalde nipón a los concejales presentes, antes de pronunciar un breve discurso en el que deseó a los visitantes «una estancia agradable y fructífera».

«Espero que estos días se sientan completamente acogidos en esta ciudad que siempre ha sido reconocida como abierta y acogedora. Confío que en estos días asentemos unas sólidas bases para afrontar juntos un futuro de amistad», añadió la alcaldesa.

Seguidamente, Masaji Sanai se dirigió a todos los presentes para, en primer lugar, agradecer a todos los miembros del Ayuntamiento de Pamplona «por recibirnos tan cordialmente». «Hemos organizado esta visita conmemorando el vigésimo aniversario de la hermandad entre ambas ciudades, y para ello queremos plantar unos cerezos en el Parque de Yamaguchi y visitar el pueblo de San Francisco Javier, motivo de nuestra unión», apuntó el alcalde japonés, quien terminó su discurso con unas palabras de esperanza: «Espero que con esta visita la amistad entre ambas ciudades florezca aún más».

Tras las intervenciones de ambos alcaldes se produjo el intercambio de presentes. Además de la reproducción de las torres de San Cernin, Yolanda Barcina entregó a cada uno de los integrantes de la delegación nipona un pañuelo rojo con el escudo bor-



Yolanda Barcina coloca al alcalde nipón, Masaji Sanai, el pañuelo rojo.

gado de la capital navarra. La propia alcaldesa anudó el pañuelo al cuello de su homólogo nipón y de su esposa, Sachie Sanai.

Exposición

Una vez culminado el acto oficial, la representación de Yamaguchi, Yolanda Barcina y una decena de corporativos se desplazaron en el autobús habilitado para los huéspedes hasta la Ciudadela. Allí, les esperaba la inauguración de una exposición fotográfica sobre el Japón del siglo XIX.

El comisario de la misma, Ángel Carrera, explicó a los presentes que las fotografías de la muestra forman parte del gusto por el exotismo oriental que invadió Europa en la segunda mitad del siglo XIX. Benito Francia (Alberite, La Rioja, 1854; Peralta, 1910), médico Mayor de la Armada, jefe de Administración Civil e Inspector General de Beneficencia y Sanidad en Filipinas, recopiló toda una serie de imágenes que ahora se exponen en el Pabellón de Mixtos.

Yolanda Barcina examinó la muestra junto al alcalde nipón y su esposa, que no se desprendieron del pañuelo rojo en ningún momento. En la misma sala se sirvió un pequeño aperitivo para todos los presentes, a base de embutidos, chistorra, canapés y tortilla de patatas, todo ello regado con vinos tinto y rosado, champán y refrescos.

Una vez terminada la visita a la exposición, la delegación japonesa pudo disfrutar de unos minutos de asueto antes de acudir a la Sociedad Gastronómica Nardí, donde habían sido invitados a una comida en la que también estuvo presente parte de la corporación pamplonesa.



Fco. Javier Zubiaur muestra a la delegación la planta románica de la catedral.

Aprender japonés

A las cinco de la tarde, los 23 integrantes de la expedición nipona llegaron a la Escuela de Idiomas para rendir visita a los casi cuarenta estudiantes del primer curso de japonés instaurado en esta institución. En la puerta del centro recibieron al rector, Pedro Cardenosa, el jefe de Estudios, Patxi Tellerave, el director del Servicio de Enseñanzas de Régimen Especial del Gobierno de Navarra, José Luis Yanguas, y la profesora de japonés, Mayumi Suzuki.

Pedro Cardenosa, tomó la palabra para agradecer la visita «en las pocas palabras de japonés que he aprendido». A continuación, Masaji Sanai entregó los premios del concurso cultural sobre el país oriental efectuado entre los alumnos, que recayeron en Javier Noguero, Iván Barrutia y David Iriarte. Asimismo, los alumnos tuvieron oportunidad de, en perfecto japonés, dirigir sus preguntas a las autoridades de Yamaguchi.

Dado lo apretado de la agenda de la delegación de Yamaguchi, hubo de suspenderse la exhibición de «kebana» (palabra nipona para el arte floral) preparada para la ocasión, por lo que la visita terminó con un intercambio de regalos.

El grupo japonés partió hacia la UPNA, donde les esperaba el rector, Antonio Pérez Prados, a las seis de la tarde. Una hora después, la comitiva visitó la Universidad de Navarra. La jornada de los visitantes terminó con una cena oficial ofrecida por el Ayuntamiento de Pamplona en el Señorío de Otazu.

UNA LARGA JORNADA

■ **Un guía de lujo.** Dada la entidad de los visitantes, el propio director del Museo de Navarra, Francisco Javier Zubiaur, ejerció de anfitrión. Les tres guías que esperaban al grupo, María Antonia Fernández, Aurora Patús y Nieves Ilundáiz, sólo tuvieron que acompañar al séquito.

■ **Alta tecnología.** Cámaras fotográficas y de vídeo forman parte del equipaje de mano de la delegación nipona. La característica común a todos los aparatos era la alta tecnología, en la mayoría de los casos digital.

■ **Una excepción.** El director del Museo de Navarra transigió por una vez (y sin que sirva de precedente), y permitió a los visitantes nipones tomar fotografías dentro del edificio, lo cual está prohibido.

■ **Buena traducción.** No podía ser de otro modo, porque hasta cuatro intérpretes acompañaban al grupo. Dos de ellas residen habitualmente en Pamplona, otra acompaña a la delegación desde Japón, y la cuarta de la agencia nipona de turismo en Barcelona.

■ **A la tercera no va la vencida.** Los muchos años que Masaji Sanai lleva ostentando la alcaldía de Yamaguchi confundieron a la alcaldesa de Pamplona, Yolanda Barcina afirmó, en más de una ocasión, que se trataba de la segunda visita que el alcalde nipón dispensa a la capital navarra. Pues no, se trataba de la tercera, y la propia Barcina reconoció posteriormente su equivocación.

■ **Como en Londres.** Una de las fotografías más habituales de los turistas que viajan a Londres es aquella en la que salen el propio turista junto a uno de los impenetrables guardias del Palacio de Buckingham con sus alargados sombreros negros. Ayer, en el Ayuntamiento de Pamplona, se vivió una escena parecida, salvo que en esta ocasión el hierático personaje era uno de los miembros de la guardia de gala municipal situados en la puerta del Salón de Recepciones.

■ **Cumpleaños feliz.** El concejal delegado de Acción Social, Eradio Ezpeleta, y la corporativa del grupo socialista Helena Berrueto cumplieron ayer años. Durante el aperitivo posterior a la inauguración de la muestra fotográfica, el resto de los concejales presentes en el Pabellón de Mixtos entonaron un tímido «Cumpleaños feliz», que no llegaron a finalizar por completo.

■ **Con traje.** Tanto el alcalde como los miembros de la corporación de Yamaguchi vistieron, durante toda la jornada, rigurosos trajes con corbata. De idéntico modo se presentaron sus respectivas mujeres, aunque en la mayoría de los casos se desataron por la falda. La alcaldesa no desentonó en absoluto, portando un traje de chaqueta y falda en tonos grises y violáceos.

昨日、山口の訪問団がパンプローナ市役所を訪れ歓迎を受けた。両市長はこれからも両市の絆を深めていくよう希望を表明した。

Diario de

Noticias

http://www.noticiasdcha.riiira.com

Festivales de Navarra

El ciclo se celebrará en Pamplona y estará dedicado a la cultura de Europa del Este

PÁGINA 35



Pamplona
Sábado, 13 de mayo de 2000

Saludos de Yamaguchi

El alcalde dice en japonés a los lectores pamploneses de DIARIO DE NOTICIAS que desea profundizar en el hermanamiento

PÁGINA 18

Los agricultores navarros podrán tributar menos esta campaña

PÁGINA 32

ハンプローナ市民の皆様
山口市からはるばるやってきました
これからも仲よく交流の
輪を拓けて行きます
佐内正治

ナバラ新聞に刷り込まれた佐内市長の直筆

MASAJI SANAI ALCALDE DE YAMAGUCHI

“Lo bueno de mi ciudad es que el alcalde no tiene que llevar escolta”

M.S. Pamplona
El alcalde de Yamaguchi, Masaji Sanai, es un hombre amable y con un gran sentido del humor, y lo demuestra en la amplia sonrisa que despliega ante cualquier requerimiento, ya sea para hacerle una fotografía o para hacerle unas preguntas. En Japón es costumbre que cuando alguien es presentado, se intercambien entre ambas las tarjetas, un protocolo que el primer edil de Yamaguchi cumple a la perfección, equipado con un tarjetero en castellano, que luce en el anverso una bella estampa de su país.

En su visita a Pamplona, Sanai viste de traje y luce en la solapa una insignia con el escudo de Pamplona. “Es una ciudad magnífica, sobre todo por el componente histórico que tiene y por lo verde que es. En eso me recuerda mucho a Yamaguchi”, no en vano el nombre de la ciudad que dirige significa en japonés *entrada a la montaña*.

A pesar de haber sido uno de



Masaji Sanai.

los artifices del hermanamiento con Pamplona, aunque sólo sea en los últimos diez años, Masaji Sanai todavía no conoce los Sanfermines. “Me han dicho que en esos días, los hoteles son muy caros y vienen muchos ladrones a la ciudad”, confiesa, aunque si

algún día decide conocer las fiestas lo hará “a título particular, no como alcalde de Yamaguchi, porque se enfadarían mis ciudadanos”. Igual de diplomático es cuando se le pregunta si habría algo de Yamaguchi de lo que los pamploneses podrían tomar ejemplo. “Como decía un poeta de mi país, el valor que tiene cada cultura radica en que es diferente de las demás”, dice, y sin embargo, añade que “lo bueno que tiene mi país es que el alcalde no tiene que llevar escolta”.

Amante de los vinos navarros (se exportan a Yamaguchi) y del jamón, cuyo consumo prohibió hace un año el Gobierno de Japón por el tema de las toxinas, Masaji Sanai advierte deficiencias en el desayuno navarro, porque “carece de verduras”, echó de menos un poco más de sal en las comidas, y si señaló con gran sentido del humor que “en España da la impresión de que están todo el día comiendo”.

佐内市長の話

パンプローナが取り入れるべき山口のよいところはと尋ねると「日本のある詩人は“それぞれの文化への価値観はみな違う”と言っています。私の街のいいところは、市長にガードマンがいらないということです。」と山口市長、佐内正治氏は笑顔で答えた。

佐内市長は姉妹都市交流にとって大事な人であり、多くの行事に関わってきたが、まだサン・フェルミン祭を見たことがないという。

PAMPLONA Y LA CUENCA

Pamplona y Yamaguchi conmemoraron su hermandad con la plantación de 20 cerezos

Los árboles decorarán los jardines del parque que lleva el nombre de la ciudad nipona

ÓSCAR IGDA. PAMPLONA

La alcaldesa de Pamplona, Yolanda Barcina, y su homólogo de Yamaguchi, Masaji Sanai, plantaron ayer, de forma simbólica, uno de los veinte cerezos que a partir de ahora cre-

cerán en el parque que lleva el nombre de la ciudad nipona hermanada con Pamplona. Los veinte árboles pretenden simbolizar cada uno de los años de hermanamiento entre ambas localidades, inaugurado en 1980

con la firma de los alcaldes Julián Baldiz y Tadashi Nakano. Tras la plantación, ambas corporaciones disfrutaron de una exhibición de música y baile navarro en la explanada del Planetario.

Como ha sido habitual desde que llegaron el jueves por la tarde, la delegación japonesa acudió con puntualidad británica a la cita que ayer les había preparado el Ayuntamiento de Pamplona. La alcaldesa tampoco se hizo esperar, y llegó al hotel Reino de Navarra diez minutos antes de las doce del mediodía, hora establecida para el encuentro.

Tras los saludos pertinentes, y tras interesarse Yolanda Barcina por si su homólogo nipón había descansado bien, la comitiva se dirigió hacia el Parque de Yamaguchi. Además de los 23 integrantes de la delegación japonesa, asistieron a la jornada, por parte del Ayuntamiento de Pamplona, José Luis Díez, José Ignacio Labiano, María Kutz, Gabriel Viedma, Vicente Erayo, Maite Mur, Ignacio Polo, Juan Luis Sánchez de Muniáin, José Abaurrea, Carlos Otxoa, Ainara Armendáriz, Maite Esporín y Evaristo Ruiz de Mendoza.

Ambos alcaldes izaron entonces los «Koino Mori», unos peces a modo de bandera que simbolizan la fuerza de la infancia, y que en Japón centran la festividad del 5 de mayo para desear larga vida y suerte a los niños. Con este gesto, ambas corporaciones expresaban su deseo de que, tanto los cerezos como el hermanamiento entre las dos ciudades, tuviesen una provechosa existencia.

Seguidamente, Yolanda Barcina y Masaji Sanai se hicieron con dos palas y plantaron uno de los veinte cerezos que, alrededor del lago, pasarán a formar parte de la decoración del parque. Varios integrantes de la expedición nipona se prestaron, inmediatamente, a plantar algunos cerezos más. Los árboles han sido traídos expresamente desde Japón para la ocasión.

Espectáculo musical

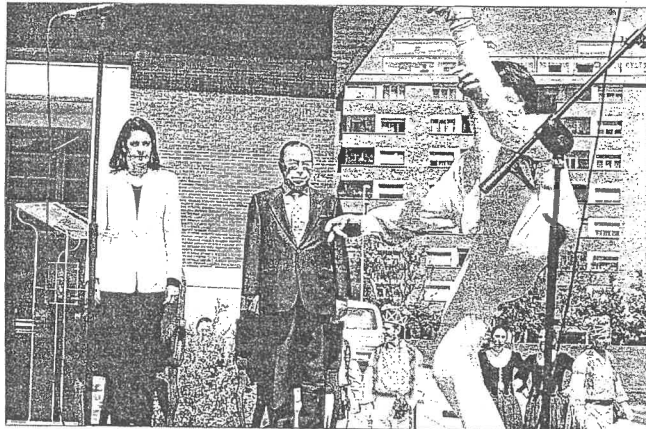
Decenas de pamploñeses se acercaron hasta el lugar donde ambos alcaldes hacían sus pinitos botánicos, animados también por la música de la banda de Oberena, que interpretó «Makilarena» para la ocasión. Pero donde más público se acumulaba era alrededor del escenario montado en la explanada del Planetario. Hasta dos centenares de pamploñeses presenciaron el espectáculo de música y baile preparado por el consistorio.

En primer lugar, subió al escenario uno de los miembros del grupo de danzas Oberena, para interpretar, ante los dos alcaldes y el resto del público un auresku de salutación. Seguidamente, el citado grupo bailó durante unos minutos una serie de danzas típicas de la zona fronteriza entre Navarra y Francia.

Las danzas regionales dieron paso a la jota navarra, en las voces del conjunto «Navarrerías». Los cinco jotos atacaron los so-



Yolanda Barcina y Masaji Sanai vierten la tierra en torno a uno de los veinte cerezos.



Uno de los dantzaris del grupo Oberena homenaja a los alcaldes bailando un auresku.

■ Los árboles simbolizan cada uno de los veinte años de vigencia del hermanamiento entre ambas ciudades

nes de «El barquero del Ebro», «La tierra en que nació», «La jota de Pamplona y Yamaguchi» y «La jota de Pamplona». La delegación japonesa dejó a un lado, durante unos instantes, la austeridad de que han hecho gala durante los actos oficiales, y aplaudieron al ritmo de la música. Finalizado el acto, uno de los intérpretes de Navarrerías regaló a ambos alcaldes unos discos con sus canciones.

Para poner broche final al acto, subieron al escenario los 50 integrantes de la banda de música La Pamplonesa que, dirigida por Vicent Egea, interpretó diversos temas vinculados a la capital navarra.

El numeroso público asistente al acto tuvo que soportar la veraniega temperatura que ayer recibió a la delegación japonesa en el acto. Por este motivo, los 23 miembros de la expedición nipona y los corporativos municipales agradecieron el aperitivo que se sirvió, en torno a la una y media, en el interior del Planetario.

Allí se encontraban, entre otros, el jefe de la Policía Municipal de Pamplona, Simón Santamaría, y la viuda del concejal

■ El grupo de danzas Oberena, los jotos de Navarrerías y La Pamplonesa actuaron para los visitantes

asesinado por ETA hace dos años Tomás Caballero. María Pilar Martínez aprovechó la ocasión para mostrar a Sachie Sanai, esposa del alcalde nipón, las fotografías tomadas en el viaje oficial que Tomás Caballero realizó a la ciudad de Yamaguchi, días antes de ser asesinado.

A las tres de la tarde, la delegación japonesa partió en autobús para visitar los castillos de Javier y Olite.

Deseos de mantener la unidad en el futuro

Tanto Yolanda Barcina como Masaji Sanai desearon, en sus breves discursos anterior al espectáculo de música y baile, su deseo de que la hermandad entre ambas ciudades se mantenga en los años venideros.

«Con este acto queremos recordar y confirmar la relación que establecimos hace 20 años. Además, en esta ocasión celebramos también un aniversario aún más importante: hace 450 años, San Francisco Javier llegó a Yamaguchi, y la huella de este santo español, luchador incombustible, quedó desde entonces marcada en esa ciudad».

La alcaldesa hizo un símil entre el Parque de Yamaguchi y la relación entre las dos ciudades: «Si de algo estamos orgullosos los pamploñeses es de la cantidad y calidad de nuestras zonas verdes, y entre ellas este Parque de Yamaguchi es una de las estrellas. Este es un lugar de encuentro y comunicación, es un ejemplo de los objetivos y de los logros que queremos alcanzar con este hermanamiento entre nuestras dos comunidades: unir, comunicar y establecer lazos de unión e intercambio para poder hacer nuevos proyectos juntos en el futuro».

Por su parte, el alcalde nipón, Masaji Sanai, destacó los veinte años transcurridos: «Ya han pasado veinte años desde que las dos ciudades llegaron a ser hermanadas. Durante este tiempo hemos mantenido una buena relación de amistad a pesar de la gran distancia geográfica, y espero que la conservemos para siempre». Asimismo, tuvo un recuerdo para el patrón de Navarra: «A lo mejor, San Francisco Javier apreció las flores de cerezo en Japón. Por ello, es un placer plantar cerezos en el Parque de Yamaguchi, que es un símbolo de nuestra amistad. Espero que sean apreciados por los ciudadanos de Pamplona».

Devolver la visita

Cuando esta tarde la alcaldesa Yolanda Barcina despidió a la delegación japonesa en el aeropuerto, se pondrá fin a tres días de frenética actividad, tanto para los visitantes como para los responsables del Ayuntamiento de Pamplona.

La buena organización, protagonista de todos los eventos preparados por los miembros del Área de Protocolo del consistorio pamploñés, ha permitido que los 23 miembros de la expedición nipona hayan visitado los lugares más representativos de Pamplona y Navarra, y que hayan disfrutado de la gastronomía foral.

Por este motivo, los responsables de Yamaguchi ya han invitado a la corporación pamploñesa a devolver la visita en noviembre, cuando se celebren los actos del 450 aniversario de la llegada de San Francisco Javier a Yamaguchi. Según Yolanda Barcina, la posibilidad de viajar hasta Japón será estudiada.

パンプローナ市長と山口市長は姉妹都市の記念に20本の桜の木を植樹。
植樹は日本（山口）の市の名前を持つ公園（山口公園）で行われた。

山口市長とパンプローナ市長は昨日（5月13日）、姉妹都市の象徴として20本の桜の木を植樹した。
20本の苗木は20周年を意味する。植樹後、プラネタリオで音楽とナバラ舞踊を楽しんだ。

思い出アラカルト



レセプションでは山口市の佐内市長とパンプローナ市のヨランダ市長（女性）が両市の益々の発展、友情を誓い合い、心から打ち解け踊った社交ダンスは最高でした。歓迎会、交歓会では、ナバラ州立大学の学生やOBで結成されたという、州立大バンドのすばらしい生演奏のリズムに乗り、ステップ軽やかに社交ダンスを興じる姿は、会場の人達もほのぼのとした感じと、心暖まる思いで一杯でした。私達も日本の歌「七つの子」「浜辺の歌」などハーモニカの伴奏で訪問団員全員で声高らかに歌い、和やかな雰囲気国際親善に努めました。



バスで会場移動する際の先導の白バイ隊員

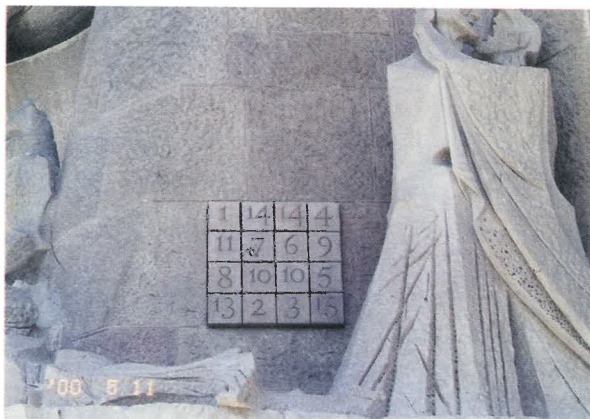


凛々しい姿で歓迎する儀仗兵と多々良会長



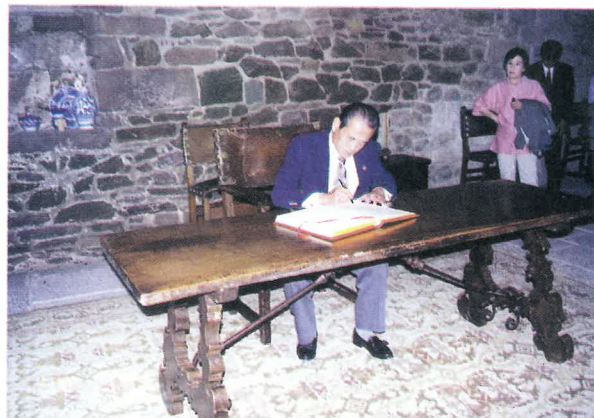
ヨランダ・パンプローナ市長・山口市佐内市長夫人を囲んで
「山口ナバラの会」の女性のみなさんが記念撮影

言葉は通じなくとも心の通う交歓会でした。「山口ナバラの会」は国際交流の一翼を担う大きな役目を果たしたといえましょう。ヨランダ市長は是非日本へ、そして山口市を訪れたいと申しておられました。



頭の体操、算数の勉強は如何？

縦をたしても横をたしても斜めにたしても答えは同じ。さていくつでしょう。この彫刻はスペイン唯一の美術工芸品です。



ハビエル城を訪れた証にサインする事務局長

「山口ナバラの会」と記帳する藤村事務局長
(スペインではサビエル城のことをハビエル城という)



近代化を誇るナバラ州立大学を訪問

ナバラ州立大学の校旗を持つ多々良会長と藤村事務局長



声高らかに歌うヨランダ・パンブローナ市長

如何に私達訪問団を暖かく歓迎しているかわかりでしょう。「心に歌を持って！太陽を持って！」というように市長自らバンドに合わせ歌をうたってくださいったことは、国際親善の一翼を担っていると心に受け止め感動させられました。



「植樹した桜の木も成長するように文化交流もよろしく」と挨拶する会長

暖かい歓迎を受け謝辞を述べる多々良会長とスペイン語で通訳する奈古高校教諭の吉武真紀さん



ナバラ州立大学生の演奏曲目を紹介する吉武さん



パンプローナ市内

“パンプローナ”の町の名はローマの武将ポンペイウスに由来するといわれており、歴史のある町です。

パンプローナは10世紀から16世紀初頭まで続いたナバラ王国の首都として栄えたところです。18世紀には“スピサの泉”からの給水で噴水を建設。下水施設、道の改善、バロック様式の宮殿、大聖堂の正面の建築を始め、多くの改革が行われました。大聖堂や城壁などの歴史的建築物は今でも町のあちこちで見ることができます。

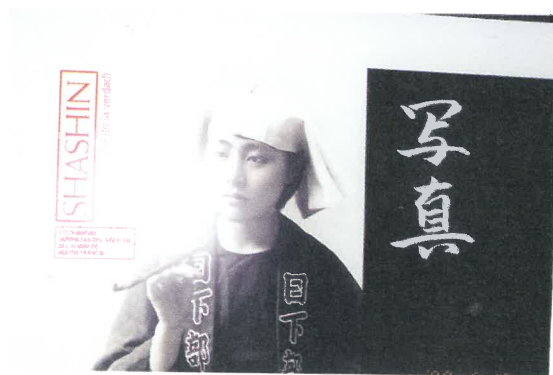
普段はアルガ川に囲まれた静かで緑溢れる町ですが、世界三大祭りである“サン・フェルミン祭”の開催中は人口も倍になり歓喜と熱気が町中に溢れます。



市長表敬訪問 5月12日(金)

山口市からは記念品として日本人形を贈りました。

昨年(平成11年)7月に就任されたヨランダ・バルシナ・パンプローナ市長からパニエロ(赤いスカーフ)と“聖セルニン教会”の模型を贈られました。パニエロはサン・フェルミン祭やナバラの祭の時期だけ皆が襟に巻く赤いスカーフです。この教会は市役所の近くに建っており、パンプローナで最も目立つ建物です。



日本の写真展 5月12日(金)

パンプローナ要塞(シウダデラ)で開催された写真展では百年前の日本の風景などが展示されていました。



パンプローナ公立語学学校訪問 5月12日(金)

今年から初めて設けられた日本語科では現在30人の生徒が日本の言語や文化を学んでいます。友好訪問団は「第1回日本文化の日」に参加しました。



スペインに“Yamaguchi”?

ナバラ州ハビエル城近くにあるホテルレストランの名称で“ヤマグチ(Yamaguchi)”なのです。パンプローナ市にある日本庭園の“山口公園”にしろ、スペインにある“山口”という名称が付けられていることは如何に日本という国を理解し信頼して頂いているかを物語っているようです。450数年前の大内義隆とサビエルの出会いが今日の国際交流となっていることは山口市にとって、重要な意義があるといえましょう。